

菜の花

少女の給仕で朝餉をすました。新聞の天気予報と菜の花の田甫を見る。
(比企)

桜

天空に咲く桜があるならば、富士の山頂で落花が踏める。

(水巴)

以上は第一期の作品である。第二期は曲水二巻頃から三四巻頃主に楽堂氏の選で発表されたものである。

麗か

麗かな日を浴びて釣堀で釣糸を垂れてゐる。ふと帯の間から時計を出して見ると、向ふ側に釣つてゐる人も時計を出した。(長頸子)

萩の花

私は雨傘が大好きだ。雨傘には一生贅沢をして見たいと思ふ。去年深蛇の目を買った翌日の雨に兄の控家へ其れをさして出かけた。帰りに頭の上に赤いものが見える。其れはこぼれ萩の二つ三つ。
(つゆ女)

落花

自転車で落花の堤を徐行しながら大口を開いて見た。顔に当る花はあつても口の中へは一片も入らなかつた。
(苔雨)

寒

零下三十幾度の日が二三日続くと凍死者は百を以て数へらる。店の軒、町の角と所嫌はず死体が横はつてゐる。それ等は殆んど阿片溺愛者の果である。
(満州木三)

桜

中学の頃、加奈陀の宣教師の許に居った事がある。夕暮の庭へ出ると、庭の隅で宣教師の幼い娘がたつたひとり、銀の匙で一面に散りしいた桜の花片を掬つて遊んでゐた。傍へ蹲むと、黙つて二ひら三ひら掬つて掌へのせてくれた。
(長頸子)

夏の雨

聽て汽車が森にさしかゝると、雨に一際鮮かな色を増した青葉や其の下にぐんぐ伸びてゐる夏草が窓一杯に迫つて来て、汽車は急に青々した海の底を走つてゐるやうだ。
(蝙蝠)

秋の夜

日が暮れるとすぐ雨戸をしめる。秋の夜の灯は少しも外へ洩らしたくない。
(千葉城)

秋の日

真赤な秋の夕陽が海の方ばかり照らしてゐる。
(碧川子)

秋日

秋の日が直赤になつて沈む時、私は好んで突堤を歩く。沖へ行かれるような気がする。
(千葉城)